

いま、子どもたちは

じっくり見つめてつきあう時間、

ゆっくり育って伸びる実感

尾形 節子

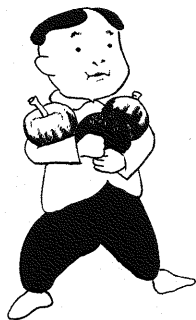
Pくんは小学校一年生。いつも午後一時三〇分過ぎに小学校から帰ってきます。児童館の玄関で靴を履き替えて、学童保育の部屋（児童館二階の一室）に「ただいま」と入っていきます。そして、ランドセルを部屋に置き、連絡帳を学童の先生に渡すと、あっという間に部屋を出て一階に降

りてきます。「おがさーん、なげっこしよう」「いよいよ」というのが私たちの挨拶代わり。他の子どもたちが集まってきて児童館がにぎやかになるまでのほんの一〇〜一五分間、二人でなげっこ勝負（思い切りボールを投げて、相手が取れなかつたら一点ゲットできる。先に一〇点ゲットした方

が勝ち)を楽しみます。最近では、互角の勝負ができるようになってきたので、私もPくんもおたがいにも楽しい遊び相手という仲になっています。八ヶ月の間に随分上手になったPくんなのです。上手になったおかげでまでまでドッジボール(キャンディボールという幼児用の柔らかいボールを使つてする内野のみの室内ドッジボール。子どもたちの間ではやっている)やミニサッカーなどのスポーツゲームにもなんとか仲間入りできるようになってきました。

八ヶ月前、はじめて会つた頃のPくんは、いつもイライラして周りの人にあたりちらしているという様子でした。私が児童館に勤め始めた五月というのも難しい時期だったのかもしれませんが。子どもたちは入学・進級直後で、しかも小学生は運動会前、中学生は中間テストというタイミング。新しく出会う場所・友達・先生、はじめての授

業・行事……、いろいろな要素が重なり合つて複雑で、生活のペースが落ち着かない五月。それぞれの子どもたちがそれぞれに不安定な時期だったのだと思います。とにかく、児童館で出会う子どもたちが、どの子どもどの子ども男女の別なく、ちよつと気に入らないと思うとキツイ悪態をついてくるのです。その言い方のキツイことといったら驚くばかりで、「こんなこと面と向かつて言われて、新卒の頃の私だったらかなりへこんで、下手したら立ち直れなかつたかも……」と思うようなことを平気で言つてきます。でも、そこでへこんでいたら子どもたちとの暮らしは生き抜いてい



けません。「まあ、私自身が試されているんだらう」とまずは様子見に徹しました。

しばらくすると、子どもたちには子どもたちのルールがあつて、その上で自分の居場所を必死で確保している感じが感じとれるようになってきました。キツイ言葉は、攻撃するための剣というよりは、自分の身を守るための盾であるように思われました。はつきりとは明示されないわりにはどこか厳格な子どもたちのオリジナル・ルール、一緒に暮らしていく上での暗黙の了解といったものがなんとなく私にも感じられるようになってきました。新年度の生活も軌道に乗り落ち着いてきた夏休み前には、それぞれの子どもたちと私の関係も「児童館にお互いがいて当たり前」と思えるくらいになってきました。でも、そんな時期でもPくんはやはりイライラしていて、むやみやたらにいろんな子どもとぶつかっていたのです。

Pくんは、暗黙の了解というのが苦手なようでした。「これは絶対していい」「これは絶対してはいけない」と明確に線引きできるルール（例外のないルール）は理解できても、「こういう時は良くて、こういう時はだめ」というような臨機応変なものは実感としてわからない。想像の範疇を越えているのです。だからそういう状況になると、訳が分からなくなるとんがってしまふのです。

たとえば、すごく仲良しの二人がおたがいにボールをぶつけ合ってげらげら笑っているところを見かけると、自分もそこへ行つて彼らにボールをぶつけ出します。「入れて」などの言葉もかけずにやってしまうので、相手の二人は「何で急にじゃまするんだよ」と一致団結してPくんをボールをぶつけ出します。Pくんには、ボールをぶつけて笑つて楽しむさしか見えていない（この二人はボールをぶつけてもいいんだ）と思つてい

る)ので、自分に急に向かってきた二人の敵意の意味が分かりません。わからないけれども、当座の敵意から身を守るため、泣きながらはむかつて行きます。やり返されて悔しくて、わめき散らします。周りの子どもたちは、「またPがやなことして、一人で怒って泣いてる」とうわさ話に花を咲かせます。

その展開があつという間で、しかもそれが落ちていた頃にはまた別のトラブルを引き起こしています。自分で自分のイメージをどんどん悪くしてしまっているのです。本当は他の子どもたちだって暗黙の了解などというものを全部をわかって生活しているわけではありません。「あ、違つたんだな」と思った瞬間に、謝つたりギャグをとばしたりしてその場の雰囲気や和ませて、その時その時を乗り切っているのですが、Pくんはその辺がひどく不器用なのです。自分のやりたいことをさ

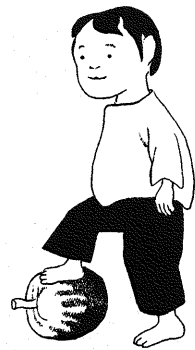
えざられることはすべて自分に対する反感の表れ、自分という存在の否定と感じてしまっているような反応を示し、提案や助言に気付く心のゆとりがなくなってしまうのです。

七月半ば頃のことです。Pくんは、「まてまてドッジボールに入りたい」と思っているのですが、うまくできないうえにすぐに喧嘩になつてしまつたので、「Pはだめ」と最初から入れてもらえません。でも、Pくんと同じくらい下手な子どもでも、ボールに当たつた時のリアクションのおもしろい子どもや小柄で当てたらかわいそうと思わせるたたずまいの子どもなどは「入っていいよ」と快諾されているのです。要するに、がっちりとした見た目のわりには下手で、当てられるとすごい迫力で怒り出し、かと思うと泣き出して恨みごとを言うPくんは、他の子どもたちからすると一緒に遊ぶには荷が重いということなのです。

でも、小学校一年生のPくんにそこまで客観的に考えろというのは無理な話です。だからPくんは「自分だけ、入れてもらえない」「自分だけ、外される」と悔しい思いをかみしめながら、キャンディボールを抱えて強がっています。いつもキャンディボールを抱えて、怒った顔で児童館の中にいるのです。私は、「誰かと一緒に遊びたいからボールキープしているのよね。でも、今仲間に入ってもすぐいざこざになって、『やつぱりPってめんどくせー』というイメージばかり強くなってしまふから逆効果だし。要するに、もうすこしキャッチボールができるようになれば仲間に入れるのでは……」と思いました。そこで、「あ、ボール持つてるんだ。キャッチボールしようよ」と誘ってみました。「やつてもいいけど」というのがPくんの精一杯の強がったこたえでした。

あらためて二人きりでやつてみると、思っ

た以上に、Pくんはキャッチボールが下手でした。まず、ボールを投げてもあまり前にいきません。肩がうまく入らないために、ボールに力が乗っていないのです。しかもなまじカッコつけて投げるものだから、かえって下手に見えてしまうのです。でもまあ、これは良くあることだし、慣れればすぐ上手になるようなことだと思つたので気になりませんでした。大変だったのは、かなり緩くなくてもボールが取れないということでした。ボールを投げるといことは、極端にいえば自分との戦いのみですが、ボールを取るためには、相手がボールを投げる様子を見ていることや



相手と呼吸を合わせることなどがとても重要になってきます。Pくんは自分がボールを取るイメージでいっぱいなので、ボールを取るために必要な準備や情報集めをしていないのです。このことは、「自分の『やりたい』気持ちでいっぱい、かえってやりたいことができなくなっている」Pくんの生活全般とも重なってくるような気がしました。そこで、是非ともPくんとキャッチボールを続け、それを通してお互いの存在に気付くことができるようになりたいと思いました。

ところが、そんな私の思いとは裏腹に、Pくんはすぐにキャッチボールがいやになってしまいました。うまくいかないからおもしろくないのです。でも、Pくんの「人とかわって遊びたい」という気持ちはとても強いのです。だから、Pくんは私に「(自分に) ボールを当てて」と要求してきました。これは私にとっては、結構な試練でし

た。あてつこのように、「おたがいに当たりたくないと思っている」という前提でボールを当て合うゲームなら私も楽しむことはできます。でも、目の前にただまっすぐ立っている子どもにもボールを当てて「楽しい」とは私自身がどうしても思えなかつたのです。何回かPくんの望むようにボールを当てても、どうしても後味が悪くて、「なんかキャッチボールのほうがおもしろい」と提案してしまいます。でも、Pくんはうまくできないことなんかやりたくないのです。「ボールを当てて」と頼んできます。Pくんにとっては、一緒に遊んでいるこの時間がこの上なく楽しいらしく、ここにご笑みがこぼれて、嬉しそうな表情があふれてきます。今Pくんが必要としているは、「相手の状況に気付くこと(私が児童館の指導員として思うこと)」ではなく、「自分の気持ちに寄り添ってくれること」なのだということがピンピンと伝

わってきました。

それが伝わってきた以上、そこから始めるしかありません。しかたがないのでがんばって、「私がボールを当てる↓当たったらPくんが「ボンバー」と叫んで爆発する」という遊びに落ち着きました。でも、私自身がそれを楽しいと思つてやるためには自分のテンションをかなりあげていく必要があつて、二、三回当てる、「どうにかしてこの流れを断ち切りたい」と思つてばかりいる自分に向き合わなければなりません。私自身がか心から楽しいと思つてPくんとすごせるようにならない限り、Pくんの「自分に寄り添つて欲しい」という思いは満たされないし、「相手の状況に気付いて欲しい」という私の思いも届かないと確信しながらも、自分の気持ちをそこまでもつていかれない日々が続きました。

そんなある日、私がQくんと山崩し（将棋）を

しているところにPくんがやってきました。「おがさーん、あてっこしよう」というので、「今、山崩しの途中だから行けないよ。一緒にやる？」と反対に誘ってみました。Pくんと私との時間も随分重ね、「誰でもいいから相手をして欲しい」という存在から「おがさんと遊びたい」と思つてもらえる存在になつてきた頃だったのだと思えます。ちよつと前までだったら「この人がだめだったら別の人」と即座に動いていたのですが、この日は「じゃ、やる」と言つて仲間に入ってきました。Pくんは山崩しをするのが初めてでしたが、ルールはすぐわかり、しかもとても上手でした。「うまいねー」と周りからも認められ、とても嬉しそうで楽しそうでした。Pくんは普段うまいかない分、うまいったときは本当に嬉しくて、笑いが自分の中からこぼれだしてくるのです。嬉しい時の笑顔が本当に無防備で、「いかにいつも

はりつめていたか」ということが実感されました。山崩しはPくんにとって子ども同士で安心して遊べるとも楽しい遊びとなったのです。楽しく遊ぶ中で、言葉のやりとりも弾み、相手の様子に目を向けるゆとりもできてきました。楽しそうに遊んでいる姿は周りの子どもたちにも見えています。むやみやたらにざわざの頻度も減っています。遊びの仲間に入れてもらえるチャンスもちよつとずつ増えてきました。

夏休みあけの九月。キャッチボールも随分できるようにになり、大人が審判に入ればまてまてドッジボールにも参加できるようになってきました。あいかわらず「自分がやりたい」思いは強いので、味方チームの子どもが取ろうとしているボールまでも体当たりで取りに行くところは文句の言われっぱなしです。でも、本人なりに「しまった、やっちゃった」とは思うようになってきました。

ミニサッカーがやりだした二月。まてまてドッジボールよりもルールが複雑でPくんには今ひとつよくわかりません。でも、ミスプレーをして仲間から文句を言われても、すぐには遊びから逃げないようになってきました。ちよつと動きを止めて、ゲームの成り行きを見てからまた動き出すようになったのです。ゆっくりゆっくりとPくんの力が蓄えられて伸びていつている気配が感じられました。

子どもたちとの四季。

緑しげる 夏、実りゆたかな 秋、

落葉たくわえ、木芽ふくらむ 冬、

花ひらく 春。

それぞれの喜びを味わいながら過ごしていきたいと思っています。

(西東京市在住)